

今こそ将来のあり方を

工藤 英明*

天田財団助成事業が始まって10年目を迎えました。一昨年急逝された宮川松男先生の後をお受けして選考委員長に任せられたばかりの私が、FORM TECH REVIW 1996を皆様にお届けするに当たり、一言ご挨拶申し上げます。

残念ながら本年度も昨年に続いて財源上の理由から、助成研究成果発表会 Form Tech を実施できませんでした。しかし今回お届けする本誌には、本財団の助成による塑性加工計測に関した成果を集録することができました。塑性加工プロセスの制御が理論、シミュレーションあるいはデータベースだけで完全には行えない現在、加工計測とその情報処理技術の助けによってのみ実現できる訳ですから、本誌が皆様方のお仕事に何らかのサゼッション又はヒントを差し上げられることを願っております。なお本誌の内容に関するご注文、ご意見をぜひお寄せ下さい。研究開発助成、普及事業の参考に致したいと思っておりますので……。

さて今回は選考委員会や企画委員会で最近話題になっている助成のあり方、選考規準などについてお話申し上げます。本財団の運営は故天田勇理事長のご寄付による株式の配当と銀行預金の利子によって行われていることをご承知の通りですが、現在の経済事情のため、今日までの蓄えを吐き出しても助成可能金額は従来の半分を割りそうな状態です。日本国民の大方が現在受けている苦しみを共有しているわけです。こういう時に、初めにさかのぼって、何のために、どういう研究・開発を助成するべきか、検討し直すことは止むを得ません。

まず対象とする加工の種類ですが、今日、国籍不明の加工方法が次々に現れる一方、塑性加工そのもの、あるいはその設備を支援する非塑性加工の役割が重要になりつつあります。塑性加工技術のグローバル化と

も申せましょう。これらは塑性加工とのかかわりが具体的なプログラムに入っていれば、助成対象として考えることに致しております。

加工の対象となる材料については、全体あるいは一部が固体で塑性変形に関与するものならば金属、ポリマー、セラミックスそのほかでも差支えありません。

研究開発に要求される性格として産業界とのかかわりの深さがあります。他方、萌芽的課題も歓迎されております。この両性格とも大切であることには間違いありませんが、両立となるとなかなか難しそうです。皆様のアイデアによって両クロスバーが同時にクリアできれば素晴らしいと思います。選考委員会としても助成した研究・開発について、この両性格に照らした追跡調査が必要ではないかと、私個人は考えております。

このほか、将来ふたたび資金が豊かになったときは、公募された特定の重点研究開発プロジェクトに対し高額の助成を行うことも、選考委員会の夢になっております。このプロジェクトの課題については未だ議論されておりましたが、私には、神馬敬委員が FORM TECH REVIEW 1994年、4巻1号の3ページに書かれた巻頭言の中にヒントがありそうな気が致します。又本財団の助成の狙いの大元になるのは、「物造り」を愛する多数の若者の存在であることを考えれば、この若者を育てることは文部省、通産省共通の研究テーマとして追求されてもよいのではないのでしょうか。

以前にもまして高額の助成のできる日を夢みながら雌伏しつつ、本財団の助成について将来計画を練ることが必要と思ひ、幾つかの話題を並べて見ました。読者の皆様方からの忌憚のないご意見を心からお待ち致しております。

* 横浜国立大学 名誉教授 当財団評議員・選考委員長